



## 著者プロフィール

伊藤伊那男(いとう・いなお)

昭和24年7月7日、長野県駒ヶ根市に生まれる。伊那北高等学校、慶應義塾大学法学部政治学科を卒業。仕事は野村證券、オリックス、金融会社経営を経て、神田神保町に酒亭「銀漢亭」を開業。俳句は昭和57年、皆川盤水の「春耕」に入会。平成23年「銀漢」を創刊主宰。句集に『銀漢』(第22回俳人協会新人賞受賞)、『知命なほ』、評論に『漂泊の俳人 井上井月』、エッセイに『銀漢亭こぼれ噺——そして京都』がある。日本文藝家協会会員、俳人協会評議員。

〈句集『然々と』より転載〉〈2018年7月7日時点〉

## 『然々と』

(自選15句)

伊藤伊那男

みずずかる信濃は大き蜚籠  
魔法瓶あるだけ並べ甘茶寺  
菊枕には重すぎる頭かな  
露の世とつづやいてみて露の中  
股引をもう見られてもよき齢  
マッチ一本迎火として妻に擦る  
動かせば火鉢に爺がついてくる  
ポーナスを自分に出してみて淋し  
白鳥の白炎として降り立てり  
蝮酒二日ほどして少し効く  
湯たんぼの慈母のごときを足蹴にす  
春火鉢あればあつたで手をかざす  
山笑ふ若草山もそれなりに  
京の路地一つ魔界へ夕薄曇  
大仏の頭が見えて冬ぬくし